様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　 ５ 月 ２４ 日現在

機関番号：２２６０４
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2020～2021
課題番号：２０Ｋ２２１４７

研究課題名（和文）親子関係に血縁がある／ないことがもたらす効果に対する人びとの意識について

研究課題名（英文）The consciousness of the effects of having or not having blood relation in a parent-child relationship

研究代表者
久保原　大（Kubohara, Masaru）

東京都立大学・人文科学研究科・博士研究員

研究者番号：８０８８１０７８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では，親子の血縁をめぐる問題への対応策を検討するために，人びとが親子関係における血縁にどのような意識を持っているかを，アンケート調査の結果から検討した．その結果，親子関係には，愛情，信頼，絆が期待されているが，それらが血縁によるものであると考えると親子関係における血縁を「非常に重要である」という意識をもたらし，愛情，信頼，絆と血縁は関係ないと考えると親子関係における血縁が「まったく重要でない」という意識をもたらすことが明らかとなった．

研究成果の学術的意義や社会的意義
親子の血縁をめぐる問題のひとつである非血縁パートナーからの虐待について，これまで検証されることがなかった血縁意識という視点から検討したことにより，ステップファミリー，特別養子縁組，第三者がかかわる生殖補助医療などにおける，血縁をめぐる問題への新たな認識の枠組みの提示することができたことは，学術的意義があるといえる．
また，判例から血縁がないことだけでなく，血縁があることが虐待の要因となることが明らかとなり，血縁意識からも虐待を検証することの必要性を提示したことは，血縁意識が要因となる虐待を減らす可能性という面で社会的意義があるだろう．

研究成果の概要（英文）：In this study, in order to examine measures to deal with the problems related to blood relation in parent-child relationship, we examined what kind of consciousness people have about blood relation in parent-child relationships from the results of a questionnaire survey. As a result, love, trust, and ties are expected in parent-child relationships, but considering that they are due to blood relation, it brings about the consciousness that blood relation in parent-child relationships is "very important". And the blood relation in the parent-child relationship brings about the consciousness that "it is not important at all" when considering that the love, trust, and ties are not due to bond blood relation.

研究分野：家族社会学

キーワード：血縁意識　親子関係　血縁／非血縁

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

ステップファミリー，特別養子縁組，第三者がかかわる生殖補助医療など，親子関係に血縁があることが当たり前ではなくなりつつある．そして，その非血縁親子関係における不和，虐待，真実告知にかかわる問題が表面化している．そのような状況のなかで，非血縁パートナーからの虐待による死亡事例における 5 歳児が書いたとされる反省文が社会に衝撃をもたらした．これまで虐待の研究においては，貧困や育児ストレスなどの相関が指摘され，その問題への対応策の検討がなされてきた．しかしながら，非血縁パートナーからの虐待の検証において，血縁（意識）という視点がないことに気づき，そこに着目した．血縁は親子関係における両者のアイデンティティ形成に影響するため，血縁がないことが虐待の要因となる可能性を検討する必要があると考える．それは，単に「血縁がない」ということの問題ではなく，「血縁がない」ということにどのような意味づけをするかという「血縁意識」の問題である．そして，判例から血縁がないことだけでなく，血縁があることが虐待の要因となることも明らかとなった．また，日本では 70 年を超える歴史を持つ AID において，その事実を知った当事者が，自分の半分を失うようなアイデンティティの揺らぎを感じたり，ステップファミリーにおいて，継子をかわいいと思えないというような血縁をめぐる問題も現れている．けれども，これまで親子関係における血縁については，「血は水より濃し」や「生みの親より育ての親」というような視点からしか検討されていない．そして，親子の血縁をめぐる意識は，このような親子に血縁が「ある／ない」ことに対する意識だけではなく，その「血縁がある／ない」ことがもたらす様ざまな事象への意識（意味づけ）である．

したがって，人びとの血縁意識を明らかにすることによって，親子の血縁をめぐる問題への対応策を提示できると考える．

２．研究の目的

本研究の目的は，アンケート調査により「親子関係に血縁がある／ないことがもたらす効果に対する人びとの意識」（血縁意識）を明らかにすることにより，親子の血縁をめぐる問題への対応策を検討することである．

３．研究の方法

本研究では，インターネット調査を利用し，1,000 名（男女各 500 名：10 代から 60 代）へのアンケート調査の結果を検討した．調査票では，「親子であることにとって血縁があることがどのくらい重要か」や「これまで親子の血縁について何か考えたことはあるか」という現在の思考だけでなく，「DNA 鑑定をして両親と血がつながっていないと発覚したら，これまでの家族との関係が変化すると思いますか」や「自分が結婚したいと思った相手に，すでに子どもがいた場合どうするか」というような仮想的事態に対する意識も検討している．さらにそれらの回答の選択理由も聞いており，その意識を構築する因子についても検討した．

本研究では，ステップファミリー形成などの仮想的事態を経験している人の回答を避けるため，スクリーニングおいてステップファミリーは除外している．

４．研究成果

(1) ジェンダー・年代による意識の違い

「あなたは，『親子である』ことにとって，『血のつながりがある』ことは，どのくらい重要だと思いますか．」という設問に対しては，以下（表 1）のような結果となった．

表 1 親子であることにとって血縁があること

	非常に重要である	ある程度重要である	あまり重要ではない	まったく重要ではない	合計
男性	147	181	119	53	500
	29.4%	36.2%	23.8%	10.6%	100.0%
女性	89	234	149	28	500
	17.8%	46.8%	29.8%	5.6%	100.0%

女性よりも男性のほうが「非常に重要である」と回答する傾向がみられ，さらに男性のほうが両極の回答を選択する傾向がみられた．「非常に重要である」と回答した理由は，男女ともに，血のつながりと愛情を連結して捉えるものが一番多かった．ほかに血のつながりが信頼や絆をもたらすという回答理由が多かった．女性特有のものとして自分が産んだことを回答理由とす

るものも多かった．そして，「まったく重要ではない」と回答した理由は，男女ともに血のつながりと愛情は別であるというものである．ほかに，心のつながりや信頼関係が重要というように，「非常に重要である」と回答した人たちが血のつながりと連結して捉えた愛情や信頼が血のつながりによりもたらされるものではないと考えていることがわかった．したがって，親子関係に期待される，愛情，信頼，絆などが血縁によってもたらされるものではなく，両者の相互行為によって構築されるものであることが理解されれば，親子の血縁をめぐる問題を「変えることができない血縁」に還元されることが回避できる可能性が示唆された．つまり，親子関係に血縁がある／ないことと関係の良し悪しが連結されない意識の構築がなされるような血縁教育が求められる．

年代における差については，「非常に重要である」という回答は，10 代 13.9%，20 代 19.3%，30 代 19.9%，40 代 27.4%，50 代 28.6%，60 代 32.5%というように年代が上がるにしたがって，「非常に重要である」と回答する傾向がみられた．「まったく重要ではない」という回答は，10 代 11.4%，20 代 12.0%，30 代 12.0%，40 代 6.5%，50 代 4.8%，60 代 1.8%というように，30 代と 40 代の間に境界があるような傾向がみられた．ただし，この結果が加齢によるものか世代間格差によるものかをここから判断することはできない．

（2）定位家族と生殖家族での違い

本研究では，仮想的事態における意識についても検討した．たとえば，現在の親と血縁がなかったとした場合と現在の子どもと血縁がなかったとした場合の意識を比較すると，親との関係よりも子どもとの関係のほうがより強固であると意識する傾向がみられる．また，親が再婚して形成された場合の継親への意識と，自身がステップファミリーを形成した場合の継子への意識を比較した場合，継親は受け入れられないが継子は受け入れられるという傾向がみられ，同じ非血縁親子関係でも，自分が継子となるか継親になるかで意識に違いがあることがわかった．

（3）当たり前という思考

「あなたはこれまで『親子の血縁（血のつながり）』について何か考えたことはありますか．」という設問に対する回答は以下（表 2）のような結果となった．

表 2 血のつながりについて考えたこと

	ある	ない	合計
男性	137	363	500
	27.4%	72.6%	100.0%
女性	148	352	500
	29.6%	70.4%	100.0%

本調査以前に親子の血縁について考えたことがある人は男女ともに 3 割程度であり，これまで考えたことがない人が 7 割であることが明らかとなった．そして，これまで「考えたことがない」回答した人の理由として「当たり前」や「機会がなかった」が多かった．「当たり前」という回答理由は親子関係において血縁があることが「非常に重要である」と回答した人の理由にもみられた．つまり，親子関係における血縁が「当たり前」という思考を持ち，それを問うような機会に遭遇しない限り，親子関係における血縁について考えない人が多いことがわかる．しかしながら，離婚の増加と再婚の増加によるステップファミリー形成や特別養子縁組，第三者がかかわる生殖補助医療のように，親子関係における血縁について考えなければならない機会に遭遇する可能性はだれにでもある．そしてその時に自分がどの立場にあるかによって，親子の血縁に対する意識も変化する．血のつながりがないことは克服できると思ってステップファミリーを形成したが，継子をかわいいと思えないという事例からもわかるように，血のつながりがないことを克服できないこともある．したがって，親子関係における血縁を問われるような機会に遭遇した時に，最適の選択や判断ができるように，まず自身の血縁意識がどのようなものであるかを自覚すること求められる．

（4）今後の課題

本研究では，ステップファミリーのように血縁親子関係から非血縁親子関係への過程を経験することによって血縁に対する意識が変容した／しないということの影響を取り除くために対象者からステップファミリー当事者を除外している．今後は，ステップファミリー当事者に，ステップファミリー形成過程において，親子の血縁に対する意識に変化があったかどうか，そしてそれはなぜか．また，良好な非血縁親子関係を形成できたケースにおいて，血縁のないことをどのように克服したか．さらに，それができなかった場合の理由を検討することにより，ステップファミリーだけでなく，特別養子縁組や第三者がかかわる生殖補助医療のような非血縁親子関係における良好な関係形成のための方策を提示したい．

＜参考文献＞

中澤香織，2013，「子ども虐待と家族関係――母親の家族内における立場に注目して」松本伊智朗編『子ども虐待と家族――「重なり合う不利」と社会的支援』明石書店，50-8.
野辺陽子，2018，『養子縁組の社会学――〈日本人〉にとって〈血縁〉とはなにか』新曜社.

野沢慎司・菊池真理，2021,『ステップファミリー――子どもから見た離婚・再婚』角川書店.
和泉広恵，2006,『里親とは何か――家族する時代の社会学』勁草書房.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 久保原　大	４．巻 518-1
２．論文標題 血縁意識を構築する因子についての一考察	５．発行年 2022年
３．雑誌名 人文学報	６．最初と最後の頁 107-124
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 久保原　大
２．発表標題 子ども虐待と非血縁パートナーー血縁意識に着目してー
３．学会等名 第19回福祉社会学会大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 久保原　大
２．発表標題 親子と血縁ー人びとの血縁意識とはー
３．学会等名 第31回日本家族社会学会大会
４．発表年 2021年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関